

第 149 回 フリートークの会 2018 年 10 月 6 日 出席者 8 名

- A さん 私は、今日初めて参加させていただきました。よろしく申し上げます。今日は私ではなくて私の妹が入院しております。今日は乳腺のお話ということだったんですけども、今月菊池がんクリニックに予約を入れさせていただいて、どんな病院なのか全然知らなくて、主治医の先生にご紹介いただいたので、フリートークの会があるということで、私の妹は婦人科がんなんですけれども、ちょっと違うんですが、お話を聞いてみたいと思って参加してみました。
- B さん 私は 10 年前に乳がんが分かって、10 年前おろおろしてたな〜って、その頃の事を振り返りつつ、とても安定して普通に暮らせることに毎日感謝です。
- C さん 私はまだ 2 年半くらいなんですけれども、今回初めて参加させていただいたんですけども、副作用とか、そういうお話をいろいろな角度から考えたいと思って参加しました。
- D さん 私は今年の 12 月でちょうど 2 年なんです。それで、そんなにたいへんな状態ではないんですけども、ただ今、ホルモン剤の副作用で全身が痛いというのと、少しこの会をお休みしてたんですけどもその間にいろいろなことがあって、一つは歯医者に行きましたら、ちょっとできものが出来ていて、舌だんだって言われたんですね。乳がんがかかっている病院に次の日に行って診てもらったら、舌がんかどうかというのは五分五分だって言われたんですね。それでもう家に帰っているいろいろ調べたら舌がんの怖さっていうのはほんとにもう倒れそうになってたんです。それで細胞を採ったらまあ舌がんではなかったということなんですけれど。そして先月は足が痛くてですね、原因不明で足が痛くて、動けないんですね、夜中。それで病院に電話して、そしたらすぐ来なさいって言われて、それで救急車を呼んで、私、生まれて初めてですね、救急車に乗ったの。それで、いろいろ検査したら、骨転移かもしれないと言われたんですけども、それではなかったんですね。それで別な病院に入院して、1 週間。そこでいろいろな検査をしたんですけども、異常なかったんですけど、そういうことで私は乳がんではそんなにステージも高くはないし、たいしたことはないと思ってたんですが、乳がんになったことでこんなにどこか痛くなると心配したり。でも 1 年目の時は何かあると毎日涙が止まらない、泣いてばかりいたんですけども、2 年目になったら何があっても涙も出なくなったんですね。それで私は精神的にも落ち着いてきて、何があっても受け入れる覚悟が出来たので、今はホルモン剤の影響でいろんなところが痛いんですが、何があってもすべて受け入れる覚悟ができたらすごく楽になって、そういう状態で、やっぱりこちらに伺ってなかったら今の自分はどうなっていたかな、やっぱり同じ病気を抱えた人じゃないとわからないですよ。私もがんになっていない友達に会うと、私はがんにならないのよっていうんですよ。私もそう思っていたんですけど、でも誰でもなる可能性がありますよね、今 2 人にひとり。
- E さん 私は 2 回目の参加なんですけど、主治医には、明るくしていれば免疫力は上がるから、あまり神経質にならないようにって言われているので、皆さんのお話をいろいろ聞かせていただきたいと思います。
- F さん 私は乳がんになって 3 年目ですけどもホルモン剤を飲んで、ちょっとあちこち痛いんですけども、こうして皆さんとお話しできて、何とか普通に生活できているからいいと思っています。
- G さん 私は乳がんで、9 年目の検査が終わったところで、今はとても安定している。ただ、世の中では、樹木希林さんが乳がんから全身がんになって亡くなったとか、ノーベル賞の免疫チェックポイント

ント阻害剤なんていうのが今やたらにテレビでやっているの、ちょっといままで私が聞いていたことと違うことをテレビで言っているの、なんかすごく混乱しちゃっています。

Hさん 私は、今指折り数えてみたら、5年7ヶ月生きました。温存でしたが、時々寒くなったりとか、あと手足のしびれが副作用で残っているので、相変わらず朝早く起きてウォーキングをしたり、自分で生き方、暮らし方の角度を少し変えながら、プラスの方にもっていけるように努力します。

佐藤先生 こんにちは。

Hさん 先生こんにちは。先日先生には立川（講演会）でお目にかかったの、みんな感動してきましたので。

佐藤先生 皆さん、来ていただいて。また定期的にああいうのがあるみたいですね。

Dさん 佐藤先生がお出になられる講演会というのは、どのようにすればわかるんですか。

佐藤先生 どのように…。いや病院内には掲示がしてあるんですけども…

Hさん 前回、先生がお見えになった時に、こそっとパンフレットを渡してくれたんですよ。珍しく先生が出されたので。

佐藤先生 いやあんまり人がいないとね、よくないかな〜と思って（笑）。

Hさん いやいやそんなことないんですけど、それで何人かで行ったんですよ。ホームページとのお知らせじゃなかったんですけど。

Gさん でも私、あの後ホームページを見たら、ブーゲンビリアの会のページで、スケジュールが載ってました。月に1回くらいちゃんとカレンダーに出てました。

Hさん でも先生、ここでお会いした方が嬉しいです。

Gさん もっと近くで質問できるっていう、気楽に質問できる、ラフに質問できるっていう気持ちで、この会はずごくいいなって。さきほどちょっと話したんですけど、なんか免疫チェックポイント阻害剤の話とか、いっぱい出ていて、なんか混乱しちゃってきているから、頭の整理に先生のお話を伺いたいなって思っています。

佐藤先生 そうですね。免疫チェックポイント阻害薬、ただまだ残念ながら…一部の乳がんについてはどうやら有効だっていうのはついこの間試験の結果がわかったところなんですね。だから今まではあれの非常にいい点と闇があるのが一ぜひ撲滅したいんですけど、変な民間療法をやっているクリニックが多いですよ。いわゆる免疫療法。昔からありますけれどもね。血液を抜いて、そして一部の細胞を増やして、活性化させて、そしてまた体内に戻す。で、あんなのやってもちっともよくなりません。それは理屈では成り立つことが実際には、試験をやってみると、効果がないということが山ほどあるんですね。理屈通りに物事が全部行くのであればこんないいことはないんですけども、ですから最終的には臨床試験で確認をしないと患者さんが、大切な時間、大切なお金、持っていかれてしまうと。今回の、がんの免疫関与というんですけどもね、つまり、僕たちも学生時代に習っていたのは、細胞、免疫、リンパ球というのは、その時、ヘルパーT細胞というのと、サプレッサーT細胞

という免疫を上げる方と抑える方、2種類の細胞があると言われていたんですね。免疫がどんどん進んでいってしまうと、花粉症だとかね、たいへんなことになってしまったり、あるいは何かアレルギーがあった時に、止まらなくなってしまいますよね。免疫は非常に大切だとは思いますが、例えば感染症を起こしてしまって、それに対して免疫反応を起こす。ばい菌を殺そうということで一生懸命その時免疫が不活されるわけですが、ある程度のところでそれはストップをかけなければいけないわけですね。どんどん熱が出っぱなしになってしまったり、どんどん好中球が増えてしまったりするといけないうので。ということが学生時代は言われていたんですが、最近はそのように免疫を調節するリンパ球があるというのが分かってきて、調節をするT細胞。私たちが学生の頃は、そういう概念がなかったんです。で、どうやらがん細胞というのはその免疫を調節する、アクセルを掛けたり、あるいはその逆をしたりするような細胞に、何らかの刺激を与えてしまって、まあ、簡単に言うと自分のがん細胞は殺さないでくれというような指令を出しちゃうんですね、その免疫を調整する細胞に。で、体の中の免疫は、そのがん細胞を殺すことができないんです。敵だと認識しないので。ですから先ほどのへんな免疫療法クリニックのやっていることっていうのは、まったくとんちんかんな。つまりその免疫をいくら不活させたとしても、その免疫自体ががん細胞を認識していないので、まったく意味がない。というのが分かってきて、そのへんな免疫クリニックは今、何にシフトしたかという、オブジーボであるとか、Tトゥルーダーであるとか、いわゆる免疫チェックポイント阻害薬を使いながら、免疫を不活させるというようなほうにシフトしたんですね。でも今度そうすると、ああいった薬品というのはお金が高いから、オブジーボにしてもTトゥルーダーにしても、そういった不適切な使い方というのは保険が利かないので、量を極端に減らして、患者さんが使えるような量にして今までの免疫療法をやる。また変な方向に行きだしているんですが、でも大切なのは、今までの免疫治療の人たちが言っていたことがどうやらあてにならないということが、今回のノーベル賞受賞で皆さんに周知されるようになったのはとてもいいことだなと。免疫をいくら上げたって、免疫チェックポイント阻害薬という概念が分かれば、いくら今まで何とかクリニック、今まで言っていたことあれは全部ウソじゃないですか、免疫どんどん上げたらがん細胞いっぱい殺してくれるってキャッチフレーズでやってたのに、どうやら今回のノーベル賞の概念から言うと、がん細胞はいくら免疫を不活しても効果がないっていうことでノーベル賞取ってるんですね、っていうことで、患者さんがより賢くなってくれればいいな〜って。ただ相手方はそれでまたすり抜けますからね。非常に怖いんですが、そういったものが自然と淘汰されてくれればいいな〜って思っているんですが、ただあれがなんでもかんでも効くわけではないので。肺がんに関してはとてもいいデータがあるんですが、だから肺がんも全部があれでいいわけではないんですね。

Gさん 30%。2割、3割って言ってましたね。副作用もあるって。

佐藤先生 2つ考えなければならないのが、ああいったお薬は、効果がどれくらいなのかということもそうなんですが、他にもっといいものがあつたらそっちの方がいいわけですね。例えば乳がんの世界でもまた新薬がどんどん出てきて、9月にもまたもう1つ認可されましたけれども、例えば他にもっといいお薬があれば認可されたお薬以外のお薬を使った方がいいわけですね。ですから肺がんに関しても、何でもかんでもああいったお薬でなくて、他のお薬が有効でないタイプのがんに関してはやってもいいかもしれないし。あとは副作用の問題。乳がんに関しても同じなんですね。免疫チェックポイント阻害薬どうやら効果がありそうだなというような対象の方は、この中でも耳にされている方がいるかもしれませんが、トリプルネガティブ乳がんの中の一部の乳がんについてはどうやらメリットがありそうだけれども、じゃあHer2陽性の乳がんに対してメリットがあるかどうかということ、メリットはあるかもしれないですが、圧倒的に後発療法の方がメリットがあるわけなので、まあ、臨床試験はされないわけなんですね。そういうことで、どれだけ効果があるか、副作用があるか、あるいは他の治療と比べてどうなのかという観点から考えていった方がいいかなと。なんでもかんでも免疫チェックポイント阻害薬ではないと。

Cさん 私は今日初めて参加させていただいたんですけれども、乳がんの手術をする前に、10回抗がん剤を受けたんですね。ところが、10回のうちの後半に足がすごくむくんで、リンパ浮腫ということだったらしいんですけれども、足がそのまま硬くなっちゃったんですね。指も曲がらない状態で、先生によると、これは副作用だから、3ヶ月くらいで治るということだったんですけれども、未だにまったく硬いままなんです。先生によると、これは治療法がない、ということなので、どうしたものかなと、歩くのもほんとに大変なんです。手術した主治医の先生は、足がこうなっても、腫瘍が小さくなったんだからそれでいいんじゃないですかという答えなんです。ですから、私としては確かにがんは小さくなったからいいんですけれども、こういう足の硬くなった状態はどうしたものかな〜って。体から抗がん剤が抜けるのを待つ以外にないんじゃないかなって先生は言うんですね。ですから、腕の方はなんともないのに、足の方に出て、未だ全く改善していないんです。最初6ヶ月くらい空気圧迫療法にも通ったんですけれども、まったく改善されていないんです。リンパの手術を受けたんですけれども、それでも全く変わらない。で、とても痛い思いもいたもんですから、もうこのままでいいかな硬いままでもいいかなと思っていたんですけれども、2年半になるんですけれども、硬いままの足で歩いていますから、それに伴って膝が痛くなる、股関節が痛くなる、腰が痛くなる、どうしても足が突っ張っちゃうもので、膝を曲げないと歩けないんですね。だからいろいろなところに弊害が出てきて、とても歩行が困難という状態なんです。自然に体から抗がん剤が抜けるのを待つ以外にないかな〜っていう、まあ、抜けるのは個人差があるので、2年で抜ける方もいれば、5年抜ける方もあって、そういうお話なんです。その抗がん剤が抜けるっていうことをどういうふうにとらえたらいいのかなって、ちょっとその点をお聞きしたいなって。

佐藤先生 まず、ご病気はなんだったんですか。

Cさん 乳がんです。左の全摘ですね。

佐藤先生 乳がんで、お腹の手術であるとか、婦人科系の手術の既往はないんですね。

Cさん ないです、ないです。左の全摘して、リンパに一つあったくらいで。まったく腕はなんでもなくて、両方の足が蜂窩織炎みたいになったんですね。今さら先生がどうのこうの言ってもあれなんですけれども、もうちょっと酷い状態の時に何らかの処置ができたらな〜っていうのが正直思うんですよね。

佐藤先生 その症状が出た時点でお薬を変えるべきだと思いますけど。こういう個別の話をする時ってほんとに話していいのかなって。後悔したりして欲しくないの、どうなのかなって思うんですけれども、まあ聞かれたことに関しては答えようと思いますので。

Cさん